岩手大学教育学部研究年報　第四十一巻第二号（一九八二・二）

藩校と鈴門

――本居派の藩校について――

中村一基
（岩手大学教育学部）

序

藩校が「国学科」、即ち、皇朝学・和学に果した役割は、鈴門（本居宣長門下）だけではなく、国学諸派の問題としても、無視することはできない。藩校は、普通「主として漢学科を中心にして文字教授と人間教養を与えるのがねらいの学校、藩士の子弟をすべて入学させるたてまえの学校、従って江戸時代初期からの伝統的な教育を担当する学校」（石川謙『日本学校史の研究』二六一頁）として、宝暦以後、設立されていった。それ故、右で言う藩校と、医学校・洋学校・皇学校（国学校）などの藩の直営にかかるすべての学校を含めての藩校とは本来的には区別されねばならないが、本稿では全体的に藩校として扱う。さて、藩校に〈国学科〉が設けられていったのは、文化・文政期以後であり、それを加設した藩は九十余藩にあがり、その中で盛昌を見た藩は、秋田（本居派・平田派）、名古屋（本居派）、彦根（真淵派・本居派）、和歌山（本居派）、小野（平田派）、津和野（平田派）、福山（平田派）、高松（本居派）、平戸（橘守部派）、熊本（本居派）、中津（本居派・平田派）、鹿児島（本居派・平田派・桂園派）であった（笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究』下、二〇九九頁）。笠井氏の分析によれば、藩校に〈国学科〉が設けられそのは、宣長歿後であり、このことが各藩で宣長歿後、鈴門が形成され発展していった理由ということになる。それ故、本稿では、宣長の直接の門人のみに限定する狭義の鈴門から、本居派国学者と称される者まで含む広義の鈴門まで含めて考える。又、〈本居派および他派混成の藩校〉（彦根藩稽古館、中津藩進脩館、薩摩藩造士館、吉田藩時習館）及び、〈藩主と鈴門〉についての考察は、他日を期したい。

なお、断らない限り宣長に関する著述は、筑摩書房版『本居宣長全集』、書簡は、奥山宇七編『本居宣長翁書簡集』に拠る。又、門人の姓名に附された番号は、「授業門人姓名録」追加本（本居宣長記念館蔵、宣長全集第二十巻所収）にもとづいた通し番号である。

本居派の藩校

1　紀州藩学習館

宣長の住む松坂が、紀州藩領であることから、紀州藩に、本居派国学が隆盛したと、素直に納得されがちだが、宣長生存中は、十六名の門人を数えるにとどまっていた。後述するが、紀州藩に本居派国学の隆盛をみるのは、本居大平（30）が和歌山に移住した文化五年（一八〇八）以後である（『藤垣内門人姓名録』東大本居文庫蔵）。

〔第一表〕

年　次	入門者数	備　　考
寛政2	2	
〃 5	1	
〃 6	6	宣長訪和
〃 11	1	
〃 12	(1)*	宣長訪和
享和元	6**	滞在
計	16(17)	

注　* 寛政12年の(1)は、大平書入本のみに出ている「紀三冬」を加えた数。
　　** 寛政12年入門の6名は「金銀入帳」によって享和元年入門として数えた。

その理由としては二つ考えられる。その一つは、宣長の紀州藩による召抱えられ方である。「寛政四年壬子十二月三日自二本藩一被レ召出一賜二五人扶持一」（『本居氏系図』「本家譜」）とあるように、宣長は寛政四年（一七九二）五人扶持で召抱えられた。しかも松坂住を許可された上でである。そのことは、我々に唐突な印象を与える。この突発的とも言える召抱えの裏には、同年閏二月の加賀前田家の藩校への宣長招聘という事件が介在していた。本居清造氏によれば「宣長ノ紀州候ヨリ召サレシハ、前田家ト交渉中ニ起レルコトナルカ、或ハ前田侯招聘ノコト破談トナレル後ニ起レルコトカ、明ラカニコレヲ知ルヲ得ザレド、前田侯招聘ノ事アリテ、間モナク」（『本居宣長稿本全集』第一輯八八八頁）起った召抱えであり、紀州藩が宣長を他藩にとられないための措置ではないかという。確かに宣長は、寛政二年には『古事記伝』第一帙を刊行し、それが妙法院宮より光格天皇の御覧に入れられるなど、国学者としての令名をはせていたので、宜なえる推測である。

宣長は寛政六年十月、和歌山に赴いた。「殿のめし給ふによりて紀の国にまゐるとて」（『紀見のめぐみ』）とあるごとく、藩主治宝の御召によってであった。宣長は滞在中（十月十三日～閏十一月二十三日）、藩主の御前で『中臣詞』『詠歌大概』を講じ、その母清心院の御前では、『源氏物語』若紫巻、『古今集』仮名序・真名序『同』俳諧部を講釈している。（「寛政六年若山行日記」）。又、その前後をぬって、家中の家で歌会を催したり、宿舎で家中や社家に対して、『大祓詞』、『祈年祭祝詞』、『神代正語』、『中臣祓詞』の講釈を行っている（同上）。同年の入門者六名全員、歌会或いは講釈に出席した者であることから言えば、宣長の出張講義の成果であったとも言えよう。ただ「神職中願として、今暫講尺承度旨、寺社奉行衆へも神職中より相断、春庵よりも右之段相断、致二逗留一候」（「寛政六年若山行表向諸事扣」）とあるように、家中よりも神職達の方が熱心であり、六名中四名が神職であった。このように、一定の成果をあげはしたが、身分的には「被レ仰二付御針医格一、増二賜五人扶持一、為二十人扶持一」（「本家譜」）と、紀州藩表御医師二十七人中の一人でしかなかった（「寛政六年若山行書類」）ことは、宣長にとってたとえ「いささか先祖のしなにも、立かへりぬる」（『家のむかし物語』）吉事であったとしても、鈴門の形成にとっ

ては、単純には喜べないことであった。結果から見るならば、宣長は二度目の若山滞在中（寛政十一年《一七九九》正月二十四日から二月二十四日まで）「今夕（―正月二十九日夕）より日本紀会読、神武巻ヨリ毎夕也、後又、源氏夕顔巻ヨヲヨム、両方共毎夕也」（「寛政十一年若山行日記」）とあるように、正月二十九日から毎夕講義を行っているが（出席者は、毎回二十人前後であった《「同年二月十一日付本居春庭宛稲掛大平書簡」[1]》）、入門者は一名を数えるに過ぎなかった。また、三度目で最後の若山滞在中（寛政十二年《一八〇〇》十一月二十四日着、享和元年《一八〇一》二月二十三日出立）、藩主侍講として御前で『源氏物語』帚木巻や、『古語拾遺』を講釈し、旅宿に於いても家中の者に『万葉集』『源氏物語』帚木巻、『古語拾遺』『祈年祭祝詞』などを毎夜の如く講釈したにもかかわらず（「寛政十二年紀州行日記」）、わずかに、六名の入門をみたにとどまった。しかも、彼ら全員〈藩士〉以外の階層であった。〈出張講義〉を行った点は共通していながら、紀伊が尾張のように、入門者が多くなかったのは、宣長が医師として召抱えられたこともさることながら、道磨門のような存在を持ち得てなかったことにも拠ろう。

藩校との関係から見るならば、安政三年（一八五六）、江戸藩邸と和歌山に〈国学所〉が設けられるまで、藩校レベルで国学が講じられることがなかった（笠井助治『前掲書』下、九一九頁）。大平の代になって紀伊鈴門の隆盛（―三三七名）をみたのは、宣長の令名、藩主治宝の国学への関心と相俟って、前述した如く藩主の命によって大平が和歌山に移住した後、即ち和歌山に根づいた形の国学が普及した結果である。大平は宣長と同じく侍講として、『万葉集』『源氏物語』『古事記』を講ずるかたわら、藩士子弟にも講じた。又、命によって『紀伊続風土記』の編纂に与り、国学者として重んじられた。

〔第二表〕

本居大平――本居内遠――本居豊穎
　　―加納諸平
　　―長沢伴雄
　　―伊達千広

また、内遠は養子ではあったが、養父大平とともに、『紀伊続風土記』の編纂や、『紀伊国名所歌集』を撰輯し、又、家老水野忠英が安政元年（一八五四）江戸赤坂藩邸内に起した国学所古学館の教授となって国学を講じた。同二年内遠歿するや、その男豊穎（かい）が、二十二歳で家職を継ぎ、同三年創設された江戸・和歌山国学所で国学を講じた。その創設を建議したのが加納諸平（―夏目甕磨（417）の男）であり、彼は創設されるや総裁となり、国典・和歌を教授した（同上）。このように、紀州藩の国学は、藩校レベルに於いても、本居派国学として明治まで継承されたのである。

（附）　宣長の〈学問所〉設立の動きについて

宣長は第一回目の和歌山の旅を終えてまもなく、寛政六年（一七九四）十二月、同僚の医師塩崎宗怒と連署で〈学問所〉建設の願いを、郡奉行所に提出した。その〈学問所〉の内容は、

儒学、神学、医学、歌学等、何ニ不レ寄諸道之学問所ト仕リ、尚又有益之諸芸ニ至迄、惣体之稽古場所と相定追々興立仕度書籍をも追々相集めゆくゆくは文庫等をも造立仕度奉願候事、（中略）本居春庵方へ是迄他国より学問ニ参候者共毎々有レ之候処、御国法を奉レ畏、緩々共得逗留為レ致不レ申候処、以後者右学問所ニ逗留為レ致申度、左様ニ相成申候ハハ、松坂学門所之儀、諸国迄も相知レ、追々繁栄仕候基ニも相成可レ申と奉レ存候故、

此義も奉レ願候事、（学問所建設願書下書」）

と述べられているように、文庫を備えた、国学だけでなく諸学諸芸の研究機関であり、諸国から鈴屋に遊学してくる者達の寮としての性格を有するものであった。

宣長の〈学問所〉講想は、荷田春満の国学校や林崎文庫、豊宮崎文庫等に共通した内容を持ち、江戸時代の国学者（―特に古学派）の図書館運動史にも位置づけられるものであったが奉行の許可が得られなかった。その後、門人服部中庸（94）が、宣長の意志をついで、再度〈学問所〉の設立を請願したが、結局、これも許可がおりなかった（小野則秋『日本文庫史研究』下、三四九頁）。ところが、紀州藩は、翌文化元年（一八〇四）、松坂に〈学問所〉（のち〈学習館〉と改称）を設立、儒臣川合春川を派遣して掌教とし、後は儒官を交替で出張させ、和歌山学習館の制に倣って、専ら漢学を教授させたのである（笠井助治『前掲書』九一六頁）。このことは、紀州藩校教学の方針を如実に示している。それは「第一、学問を政治の根本とする。第二、儒教を以て教科の中心とする。第三、修己治人実用之学を目的とし詩文を作るにもその域を出ない。第四、合理主義（科学精神）を尊ぶ。」（松下忠『紀州の漢学』四九頁）と要約されるものであった。あくまで儒教を中心に据えようとする藩の姿勢の前に、国学の季節は、やはり大平の和歌山移住を待たなければならなかったのである。

2　尾張藩明倫堂

享和元年、宣長が歿するや尾張鈴門の植松有信（162）・鈴木朖（243）・加藤礎足（185）・早川文明（213）・堀田梅衛（166）・林良元妻とみ（144）・大館左右衛門妻多美（149）・市岡猛彦（450）・加藤有清（455）・平野廣臣（459）らは、本居春庭の門人となった（「春庭門人録」）。彼らは大館高門（91）・川村正雄（153）・鈴木真実（154）・礎村道彦（441）・桜山典直（471）・鬼頭吉之（207）などを除く宣長歿後春庭・大平と音信があった者の全てと言ってよい（「故翁門人姓名録之内大平并春庭方音信不絶分」[2]）。宣長歿後の尾張鈴門は、有信を中心に、有清・方穀（廣臣）・猛彦・正雄・道彦・横井良邑（273）らが古典会読（―『後撰集』『伊勢物語』）や月次歌会を行っている（享和二年（一八〇二））、植有信日記「今ひとしほ」[3]）。有信は、古典会読や歌会によって、尾張から春庭・大平へ入門していく者たちの総元締的な役割を、宣長・春庭の著書の板行（―『古事記伝注釈目録』『詞の八衢』等）を行いながら果した。それは、同じく有信の文化四年（一八〇七）「長閑日記」[4]をみれば、旧鈴門の人々とだけでなく、新たに春庭・大平の門人となった者を含め、歌会、会読を行っていることから言える。有信は、文化十年（一八一三）六月二十日歿した。享年五十六歳であった。

〔第三表〕

本居宣長―植松有信―植松茂岳―植松有圓〈国学助教並〉
　　―植松有経〈皇学二等助教〉
　　―岡田高穎〈国学教授〉
　　―鈴木　朖〈国学教授〉

明倫堂で国学が講じられたのは、天保四年（一八三三）鈴木朖によって『日本書紀』が講じられたことに始まる。有信の歿後二十年が経ってからである。朖は安永四年（一七七五）、徂徠学派で田中道磨と親交のあった市川鶴鳴（匡）（「天明二年寅正月下旬宣長宛道磨書簡」[5]）の門に入った（鈴木朖顕彰会『鈴木朖』二頁）。鶴鳴は、宣長の『直毘霊』に反駁した『まがのひれ』を著した儒者として知られる。朖の漢学の基盤が徂徠学であるゆえんである（『離屋学訓』参照）。朖の国学（―特に国語学的方面）に対する関心は、

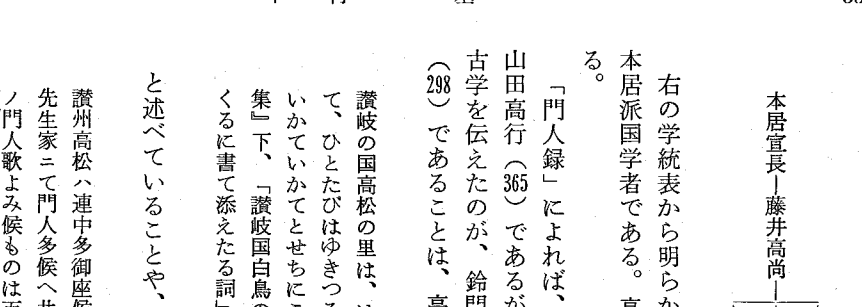
宣長の『紐鏡』を書写し、その末に『詞の玉緒』の抄を附した天明五年（一七八五）頃から顕著になった（同上、四頁）。朖は鈴屋入門に際しても、儒者としての立場を「鈴木朖か馬のはなむけにから文作りておくりける中にもろこしには孔丘（孔子）そまことによき人なるといふこころはへをかきたる」（『石上稿』寛政四年）とある如く捨てなかった。朖は、宣長歿後春庭に入門し、国語学的著述（―『雅語音声稿』《文化十三年刊》、『言語四種論』《文政七年刊》等）の一方、儒学関係の著述（―『大学参解』《享和三年成》『論語参解』《文政三年刊》）をも成し、又、『玉の小櫛補遺』二巻（文政三年刊）を著すなど和漢の学に通じた儒者であった。「（文政四年）六月二十八日儒学志厚多年格別出精仕候付御儒者被仰付」（「徳川家記録」[6]）、「（天保四年）正月二十日明倫堂教授並被仰付（同上）、「（天保六年）十二月十九日、学業格別志厚和漢之書物数多著述仕門弟をも取立候付別段之御吟味を以永々御徒格以上被成下」（同上）といった記録が、藩に於ける朖の評価を表していよう。有信との交流は「（文化四年三月）十五日。（略）。未刻過より丹羽勉（春庭門）が家の会読。常助（―朖）、吉五郎（柴田）、有信となり。」「（同）二十九日。（略）未刻過より鈴木常介（―朖）方古躰（歌会）行。市岡（猛彦）、鈴木、平野（廣臣）、山崎平瓮（春庭門）、並雄（八木並雄、春庭門）、有信出席。」（「長閑日記」）とあるように、鈴門の古参同士として親密であった。その結果、有信歿後は鈴木朖が尾張鈴門の長老格となった。

朖が天保八年（一八三七）歿して後、尾張鈴門を率いたのは、有信の養嗣、植松茂岳（大平門）であった。茂岳は有信歿後大平に従学し、文化十三年（一八一六）名古屋に帰って植松家を相続、家塾を開いた。その年、茂岳は『天説弁』を著し、以後、尾張に於ける平田学を論難排斥する急先鋒となっていった。それに対し、朖は篤胤と交流があり、むしろ篤胤の意をくんで、文政八年（一八二五）藩に篤胤を推挙している。その結果、同十一年（一八二八）十月、篤胤は藩侯の謁見を許されたが、まもなく廩米の支給を廃せられた。茂岳の排斥に拠るという（『鈴木朖』一八頁）。茂岳は朖の歿した天保八年、明倫堂典籍次座、安政二年（一八五五）、藩主慶勝の侍講、同四年明倫堂教授次座、元治元年（一八六四）明倫堂教授、慶応三年（一八六七）明倫堂国学教授、明治三年（一八七〇）致仕と全く、文化・文政期から明治に至るまで、尾張国学の中枢的人物として活躍した。そして、尾張国学は、茂岳門によって占められ、勤王の士もここから輩出した。ただ、茂岳の篤胤排斥の影響から、平田学派はふるわなかった。ところが、歌学面に於いては、尾張名古屋歌壇は、桂園派（香川景樹一門）に席巻されていった。茂岳門で、本多俊民のように氷室長翁（景樹門）の門人となった者、又、間島冬道のように熊谷直好（景樹門）の門人となった者など、国学研究から離れて、歌人となった者たちが出た（『愛知県教育史』第一巻五九七頁）。このことは、尾張鈴門の変質を意味した。

3　高松藩講道館

講道館に〈皇学寮〉が設立されたのは、慶応元年（一八六五）であり、明治四年（一八七一）七月に廃藩置県が断行されるので、わずか六年間の、国学科の存立であった。国学教授の任に当ったのは友安盛敏（明治二年、皇学寮助教）、中村黙堂（同年、皇学寮教授）、吉成弦山（同年、同助教）、松岡調（慶応元年、同督学）、岡寛（明治元年、同有職指南役）、岡彬通（同二年、同助教）、黒木茂矩（同年、同教授）であった（笠井助治『前掲書』下、一三八六頁～一三八九頁）。

〔第四表〕



右の学統表から明らかなように、〈皇学寮〉教官七名中四名は、本居派国学者である。高松藩を本居派国学の藩とするゆえんである。

「門人録」によれば、讃岐には門人が一名いる。寛政八年入門の山田高行（365）であるが、その経歴を詳らかにしない。讃岐に本居古学を伝えたのが、鈴門の高足で、備中吉備津神社社司藤井高尚（298）であることは、高尚が天保三年（一八三二）冬に

讃岐の国高松の里は、はやうよりおのか弟子のこれかれとあるところにて、ひとたびはゆきつるも、はたとせのむかし（―文化九年頃）なれは、いかていかてとせちにこふまゝに、ものをしへにゆきつ。（『松屋文後々集』下、「讃岐国白鳥の宮のみやづかさ猪熊氏に故鈴屋翁のせうそこ文おくるに書て添えたる詞」）

と述べていることや、親交のある真野竹堂に

讃州高松ハ連中多御座候。（中略）同所中村（五松）と友安（三冬）とハ先生家ニて門人多候へ共、夫ハ無限事、是も先年ゟ門人也。（中略）両人ノ門人歌よみ候ものは百人余御座候。（「年紀不明閏十一月廿五日付書簡」）[7]

と書き贈っていることからわかる。中村五松・友安三冬が高松に於ける高尚門の高弟であった。とりわけ中村五松は「むねと神典をよむにこころをとどめちからをいるる」門人の一人として期待されている（『大祓詞後々釈』文政十年刊）。天保三年、九代藩主頼恕（ひろ）が史局考信閣を設け、国史編輯を意図するや、同四年五松は起用され、同六年総裁に選ばれた（笠井助治『前掲書』下一三八七頁）。考信閣は〈皇学寮〉設立以前の国学振興の拠点であり、そこに本居派国学者が起用されたことは、高松藩国学に於いて決定的なことであった。そしてその下地を作ったのが文政七年（一八二四）以降の、友安三冬の藩主侍講という立場であったと言えよう。

4　熊本藩時習館

時習館は宝暦五年（一七五五）設立された。設立の背景に、第六代藩主細川重賢の宝暦の藩政改革がある。重賢は財政の建直しなど、改革を行うに大事なのは清廉有為の人材の養成と、弛緩した綱紀の粛正であると考え、その実現のために藩校設立を企図した。そのことは、重賢が時習館初代教授秋山玉山に与えた達示に「右ハ人材鎔鋳ノ所ニ候得ハ生徒ノ才ニ従ヒ教育勿論ニ候」（『日本教育史資料』第三冊一九六頁）と述べたこと、又、秋山玉山の制定した『時習館学規』序に「所下以教二人倫一育二英才一而供中国之用上也」（同上、二〇二頁）とあることから知られる。そのために時習館では、居寮生制度と生徒褒賞制度がとられた。ともに、英才教育の制度であった（井上義己『日本教育思想史の研究』四五一頁～四五五頁）。後述するが、肥後国学隆興の端を開いた藩儒、高本紫溟やその門で本居派国学者、長瀬田盧（真幸）（373）は、かかる英才教育の中で育ったのである。

時習館の学風は、最初秋山玉山が林鳳岡に師事し、昌平校朱子学を学んだ徂徠学派の儒者であったことを反映して「雖レ主二古義一、不レ廃二新註一、彼此参考、必帰二正当一而止」（『時習館学規』第七則）とあるように、古学を主としたが、朱子新註も排斥しない折衷

的なものであった。ところが、この学風は、二代教授藪孤山（宝暦十三年着任）が朱子学派であったことから、朱子学の方に漸次、比重がかかってゆき、三代教授高本紫溟（天明八年着任）も又、朱子学を主としたことから、紫溟の時代（寛政～文政期）には一層朱子学色が強まった。ただ紫溟は朱子学者ではあったが、国学に関心を持ち時習館に〈国典科〉を加設し、自ら記紀・律令等を講じた。ここに、時習館学風に新たに勤皇精神と皇道尊崇の風が加わることになった（笠井助治『前掲書』下、一七一九頁～一七二〇頁）紫溟の国学への関心が醸成されたのは

永井直方が蘇谷志料に云ふ、宮地村の南吉神原に阿蘇家の松林あり、宝暦の比、高本李先生（紫溟）住居ありし万松盧の古跡あり先生府学教授命ぜられざりし前阿蘇家の賓師に招かれし時、年久く住居ありしとぞ。（『阿蘇面影』阿蘇公撰）[8]

や、

近藤先生の話に紫溟先生は四十に余り、始て経学は上達なり其以前蘇山に引籠られける砌迄は、極々不得手なり、但し国学など精しかりしは、其砌大宮司の書抄借受読まれければならんとなり。（『池松筆記』）[9]

といった記述などから推し測るに、肥後の一の宮阿蘇神社の宮司（―阿蘇大宮司）に招かれて、阿蘇山麓に住み、神社の蔵書（国典）を読んだからであろう。ただ「阿蘇家の賓師」として招かれたとある以上、紫溟の国学の造詣は、既に深かったと考えるべきであろうか。滞在は「明和四年八月二十四日、家督無相違、外様御医師組」（「諸家先祖附」）[10]「阿蘇嶽九州之鎮也（中略）但少年時寓居其山址、蓋七八年）（『紫溟遺稿』）[11]から、宝暦九、十年（一七五九、六〇）紫溟二十一、二十二歳から、明和四年（一七六七）二十八、二十九歳までと考えられる。この間、紫溟が学んだ国学が、古学よりも垂加神道的なものであったことは垂加流望楠軒神道家、西依成斎と阿蘇大宮司（惟典）とが「阿蘇大宮司も、当月廿八日帰国の筈に候」（「安永八年霜月二廿三日付西依墨斎宛成斎書簡」）[12]と親交があること、又、寛政七年（一七九五）三月十五日付の長瀬真幸宛書簡で「何とそ当（阿蘇）大宮司古学出精被致候様御誘引可被成候。」[13]と、宣長が述べていることから推測できよう。このように肥後国学が垂加神道の土壌を持ったのは、やはり西依成斎が肥後玉名郡の出身ということと深くかかわるのではないか。成斎ははじめ、藩儒大塚退野（朱子学派）に学び、のち京に出て若林強斎（闇斎学派）の門に入り、強斎亡き後、垂加流神道の命脈をよく保った。延享四年（一七四七）、兄長雄の子、景翼（号墨山）が肥後より上京、成斎の教を受け、宝暦三、四年頃、成斎より望楠軒を譲られている（近藤啓吾『若林強斎の研究』三二六頁）。又、のちに、藩儒宮田壷隠のように西依成斎に私淑し、文化七年（一八一〇）紫溟教授の折、抜擢され時習館助教となった者も出てきた（笠井助治『前掲書』下一七三八頁）。

紫溟に、朱子学とともに国学の講義（垂加的）を受けたことによるのか、長瀬田盧（真幸）は、時習館の高等教育時代にあたる十八、九歳（天明二、三年）の頃から、古史古典を読み敬神尊王の志が厚く、垂加流橘家神道を肥後益城郡守山八幡宮神主守山河内守広豊（―享和元年、上京中の宣長を訪ねている『享和元年上京日記』五月二十九日）に学び神代紀の講義を聞いている。そして、肥後に鈴屋古学を持ち込んだ帆足長秋（102）も安永九年、天明元年（二十四、五歳）の頃から、同じく守山河内守について橘家神道を学んでいる。いわば長秋は真幸の学友であった。ただ、天明元年の頃、徂

徠の『鈴録』、同二年『南留別志』『絶句解』、同三年『文章一貫』を写し、同五年冬、広豊宅で玉木葦斎の『風水草管窺』を写し、漢学的には徂徠学、思想的には垂加神道の中にいた長秋が、どのような経路で宣長の学問にふれたのか、詳かでないが、翌天明六年（一七八六）四月二十七日、伊勢参宮の途次、宣長を訪い入門した（笹月清美『本居宣長の研究』三〇三頁～三〇六頁）。長秋はこの時、『直毘霊』を写して（『直毘霊』奥書）帰郷している。同門の真幸が『直毘霊』を見たことは確実であろう。又、当然の如く彼らの間で〈垂加〉と〈古学〉との比較論が展開されていったことも推測しうる。寛政三年（一七九一）六月、長秋は玉名郡分田村八幡社司杉谷彝（つね）（215）を伴い、松坂に至った。彼らは陸前塩釜神社、多賀城跡を巡って、十月上旬再び松坂に帰ってきた。長秋は松坂に於て

右万葉集二十巻諸説以本居先生校正本写之、従寛政三年亥十月二十八日濺筆于勢州松坂寓居迨同年十有二月念八月卒業／帆足下総守清原惟馨。（14）
（『万葉集諸説』帆足長秋本、奥書）

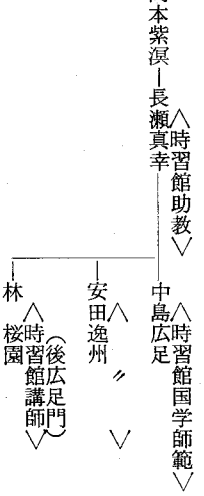
と記すように、宣長の書入本万葉集から、書入の部分だけを書抜いた『万葉集諸説』を編んだり、後年『直毘霊』の奥に

寛政三年より四年まで百有余日、松坂の里に留まりて、大人の著し玉ひける、かず〳〵の書をうつし取て、国に拡めしより、我肥後人は古学と云ふことを知れり。是長秋が功にあらずや。

と書きつけたように『神代正語』他、宣長の著述を多く写し、寛政四年二月帰郷した。それらの写本が、後に高本紫溟、長瀬真幸らを鈴屋古学へ傾斜させていったのであろう。真幸の鈴屋古学に対する関心は、前述した如く、天明六年頃からみられ、長秋等が松坂を訪れた寛政三年夏すでに「亥ノ夏状来ル／一、肥後熊本家中、長瀬七郎平　真幸」（『来訪諸子姓名住国并聞名諸子』）とあるように宣長に書簡を呈しているが、宣長は、どうしたわけか真幸鈴屋入門後、寛政五年五月二十八日付の真幸宛書簡で「然は右（寛政五年）四月三十日以前ニモ御状被下候由被仰聞候へ共、其以前ニハ御状此方へ相達し不申候。」（15）と述べている。寛政四年八月十八日肥後の国社人、吉田左度と高塚伊織介（342）とが松坂を訪れ、翌寛政五年三月朔日、真幸が訪れてくる（同上）。長秋の家集『本名草』には、熊本を立った時と思われる「御別にまゐらする」という詞書のついた真幸の歌二首と長秋の返しの歌二首がのり（笹月清美『同掲書』三〇六頁～三〇七頁）、彼らが鈴屋古学によって結ばれた心を表白している。真幸は入門後、早速宣長に「御疑問も跡より御答申候。右の内御長歌ハ此度致加筆返上申候。」（寛政五年五月二十八日付真幸宛宣長書簡）（16）と書き贈っているように、古学に関する質問をし、詠草の添削を頼むなどしている。又、真幸は翌六年四月までの江戸逗留中には、「加藤千蔭村田春海へ御出会有之候由」（同年十月十五日付〃）（17）、「千蔭春海へ折々御出会有之候由」（同年十一月十五日付〃）（18）、「千蔭春海など毎度御出会の由」（同年十二月十四日付〃）（19）とあるように頻繁に県居門加藤千蔭、村田春海と交流したり、「塙学校へも折々御出被成候由」（同六年二月二日付〃）（20）と記すように、和学講談所にも顔を出し『万葉集』の校合をしていたことが「寛政五年十月六日於江門以平春海校正本校之畢長瀬真幸／寛政六年三月六日於江門以橘千蔭校本元暦古本校合了／寛政六年九月十七日以本居大人校本写校本了」（真幸校合書入本『万葉集』巻一、奥書）（21）或いは「塙検校蔵書に万葉集古写本〔三百年余ノ古写本〕と枕草帋の異本を見侍りぬ、万葉は今の印本といささかことにして、誤字謬点等は大むねひとし」（「本居宣長長瀬真幸答問書三」寛政八年五月本居大

人添削）とあることから知られる。真幸の『万葉集』愛好の念は、『万葉集佳調』（宣長、春海、千蔭の序あり。寛政六年刊）、『同拾遺』（宣長、阿蘇惟馨（―長秋）、高本順の序（寛政七年二月の自跋）あり。寛政十一年刊）となって結集し、その影響は、門人和田厳足、中島広足に及んでいる（大久保正『本居宣長の万葉学』二五三頁～二五五頁）。その後も長秋は、寛政十年、享和元年と鈴屋を訪い、『古事記伝』『歴朝詔詞解』を写すなど（『稿本全集』第二集三〇五頁～三〇六頁）、古学の熱は失せず、文政四年（一八二一）その一期を終えた。その門人の多くは杉谷彝の門下になったという（『続肥後先哲偉蹟』八「杉谷彝倫伝」上妻博之撰）。真幸も長秋に劣らず寛政八年、同九年、同十一年、享和元年と鈴屋を訪うている。この結果「門人録」に載る肥後鈴門八名にのぼることとなった。ただその内六名が神職であり、藩士による藩校レベルの国学は、紫溟の期待にもかかわらず、長瀬真幸一人にとどまった。

〔第五表〕



因みに長瀬真幸が学校目付となったのは文化八年（一八一一）で、紫溟の歿する二年前であった。真幸が学校目付、後に、時習館助教になり、記紀・律令を講じたことが鈴屋古学を、藩校レベルへと押し上げ、その門下に中島広足・安田逸州・林桜園といった逸材を育てることになった。そして彼らが幕末尊王攘夷を主張する肥後勤王党を形成していったのである。

5　浜田藩長善館

石見鈴門の形成に最も重要な役割を果たした人物は、安永九年入門の浜田藩儒者、「小篠大記　敏初称　道冲」（「門人録」）（61）である。敏は「与二賢大夫士一謀。初創二営学舎一。」（浜田市観音寺、小篠敏墓、墓碑名、文化二年六月、屈正孝撰）とあるように、養子紀とともに、安永末年頃、家老岡田頼母（70）、藩主松平康福の継嗣康定を動かし、藩校長善館を設立させた（矢富熊一郎『小篠御野』三九頁）。後に敏が「私一生之精力は長善館と申候学館建立申立候而国中学問被行申候事ニ相成候。」（「寛政五年九月十二日付栗田土満宛敏書簡」）[22]と述懐し、また同墓碑銘にも「厳二例条一教レ之。不二数年一豪傑欝起。」とある如く、浜田藩の学問は長善館によって興起した。敏は「数々役二江戸一。入二観海先生門一問レ道。」（墓碑銘、以下「碑」と略す）とあるように、儒学面では、徂徠学派太宰春台門、松崎観海（安永四年歿）の門人であった。ただ敏が「尤精二於易一。作二周易蠡測一。」（同上）と易学に精通していたのは、

余弱冠游于平安、適会白峨新井子講易於易館、就受其説、退而潭心潛志、五十年于此此観象現辞、頗有所得。（『周易蠡測』諸言。享和元年成）

とあるように、宝暦始頃、京都で易学の大家新井白峨の講説に触れたことによる。その敏の易講説が、養子紀が

就二芸之名医恵美氏一受業。居歳余義父東海先生来講二易於市中一。余説二其説一、執二贄門下一。先生未レ定レ嗣。因乞冒二小篠氏一更レ業為レ儒。移二于浜田一事二于藩一。（北岳先生文卅[23]』）

と回想しているように養子縁組のきっかけになったものである。

彼は「至二芸州一。則為二士大夫一説レ易。士大夫悦。至レ謂二周易一。」（碑）と述べられている如く、易学に長じた徂徠学派の儒者であった。長善館の学風が徂徠学を重んじたのは、右の理由による。ちなみに、設立当時の教授陣容をみるならば、正教授として小篠敏、助教授には小篠紀（徂徠学派）、岡田頼母の弟仲竜、頼母の家大夫巌子敬（仁斎・徂徠学私淑）『石見外記』の著者中川顕允などが顔をそろえている（矢富熊一郎『前掲書』四〇頁）。そして、長善館が藩校である限り、やはり、漢学中心であったことは、敏自身の記す

一、素読之書は孝経、論語、書経、詩経、礼記、易経、春秋に限るべし、（中略）
一、講釈之書、孝経、論語、書経、礼記、易経、共六部、教授助教授分レ之可レ被レ講事。
一、会読之書、周礼、儀礼、左伝、国語に限るべし。（「年紀不明飯野莞裘宛書簡」[24]）

によっても明らかである。

では、国学はどこで講じられたのか。敏が安永八年頃、宣長に「学館造立之事被申出、（中略）又城外にも郷校造立之催、是は医学和学の積りに御座候、未地所も相定り不申候」（〔年紀不明〕二月二日付宣長宛書簡[25]）と書き贈っていること、また

無学之皇朝学は儒者ニ被笑申候故是が当世のこまり物ニて御座候。夫故学館ニ皇朝学をも立申度其致方先生へも内々及相談候得共、漢学之下へつけ申候而は不宜と被仰候。（「寛政五年九月十二日付栗田土満宛敏書簡[26]」）

という文面から察するに、国学（和学）は、「藩校と寺小屋の中間に位する」（笠井助治『前掲書』上、六九頁）郷校（郷学）において講じられたのではなかろうか。ただ、敏の言う郷校は「藩校の延長としての郷校」（同上）の色彩が濃い。敏の〈皇朝学〉講義書目が、『日本書紀』『続日本書紀』『公事根源』『令義解』等であったことは、敏の著書に、『日本書紀考証』十五巻、『続日本書紀考証』二十巻、『令義解私考』五巻、『公事根源私考』二巻があることから推測できる。そして、おそらく国学を講じる郷校は、安永八年、宣長が敏の懇請によって作った「二御霊祭告刀詞」（「安永八年六月十九日付久老宛宣長書簡」）に

今年乃某月乃某日乎、生日乃足日登択定弖、某之宅乃奥乃小床乎、伊豆乃磐境登掃比清米弖、奥山乃小柴之枝乎、打折持来弖、（『鈴屋文集』上）

とあるように、二御霊（―舎人親王、太安万呂の霊）が祭られた「某之宅」、即ち敏の宅に設置されたのだろう。敏は、長善館では漢学を、私宅（郷校）では国学を講じたと思われる。ただ、国学の郷校は、

兼而より社中五六輩申合大ノヤス丸と舎人親王を一年一度祭申候祝詞ヲ先生に作リテもらひ申候。兎角同志之少クこれもあきれ申候、併決て人ニすゝめ不申候故人少ク御座候。すゝめて致候へは後あき申候故すゝめ不申候。（「寛政五年九月十二日付土満宛敏書簡[27]」）

と回顧されている如く、国学同好（研究）会の形で進められた。ここで注目すべきは、長善館の入学資格が「自二卿大夫嫡子一、而下至二士庶之子弟一」（『北岳先生文艸』）と記すように、階層を問わなかった点である。天明三年鈴屋入門の岡田頼母が家老、三浦正道（71）は家中、斎藤秀満（72）は医師、米原充実（77）、澄川信清（76）は商人、大橋清常（75）は不明、また、寛政二年入門の米原

充興（195）が医師、野上実房（196）、山根信満（197）が神職、大黒屋佐登風（198）が商人といった具合いである。ただこのように階層は異っていても、彼等は全て藩校関係者か学生である（矢富熊一郎『前掲書』四一頁、四九頁）。彼らのほとんどが敏の推挙によって鈴屋に入門したことは、敏が稲掛大平宛の書簡に見えるように

覚

一、金百疋　芸州広嶋はりまや丁
　　いつゝ屋　末田忠八郎
一、銀三十四匁四分　石州三隅村
　　釘ヤ　澄川十兵衛
為金二分　米原敬亭
　　米原玄仙
　　社人　野上雅楽
　　大黒屋新兵衛
　　日脚村社人　山根民部
　　右は入門料
一、四匁三分　三隅ノ平原村　斎藤利三
　　右は先達入門仕候、去年之御祝義申上候
右之処、金三分、三匁八分此度上申候、残り四匁九分私方に預り置申候、
（中略）広嶋末田氏は右篤志の人にて御座候、以上
　　小篠大記
稲掛十助様

入門料等の世話をしていることから明らかである。ちなみに、右書簡が『本居宣長記念館蔵書目録』(四)に年紀不明で所載されているが、寛政二年であることは、

(一)、澄川十兵衛、米原敬亭（「門人録」では天明三年入門）が、斎藤利三とともに銘記されないのは不審としても、両者以外は全員寛政二年入門であること。

(二)、敏が通称を大記と改めたのが、前掲の寛政五年九月土満宛書簡に「私も四五年以前俗躰儒官ニ被仰付大記　改名致候。」とあり、寛政元年か二年と考えられるが、「至二寛政辛亥一（―三年）。賜三百石一為儒臣一。」（碑）と見えることから、寛政二年の方が年月のはばからいって自然であること。

(三)、寛政二年四月二日付敏宛書簡で宣長が「米原氏入門の事致二承知一候。充因（―敬亭）充興（―玄仙）ト両人相見え申候。何れニて御座候哉」と、不審な点にふれていること、（尤も、宣長の疑問も「門人録」に、敬亭は天明三年と明記されているのでおかしいのだが）。

(四)、「広島井筒屋忠八郎事、心得申候。」と、敏が推挙した末田芳麻呂（200）の入門を認めていることが、右書簡文面と照応すること。

などから明らかである。また広島の末田芳麻呂を推挙していることから、敏が広島で易を講じただけでなく、国学の講義をやっていたことも判明する。和漢の学に通じた敏には、和漢それぞれの門人がいたことは当然である。鈴屋の門人にはならなかったが

申（天明八年）ノ七月十八日来ル　○石見国益田　増野勘解由吉種（ヨシタネ）道中（冲）門人　神職／同　○同国須川邑　木嶋兵庫正　同断（『来訪諸子姓名住国并聞名諸子』）
（寛政七年）同（四月）七日来ル　一、石見三隅庄都茂村八幡宮神主　原屋采女小笹大記門人也（同上）
（同年四月）一、石見益田郷上波田村八幡主　田中弾正原屋采女弟　大記門人（同上）

と記すように、国学の門人（―神職が大部分）がいる一方、紀を

筆頭にして、「浜田勝手元メ役、小久江権右ヱ門、知行弐百石、此人敏か漢学の門弟也。」（〔年紀不明〕本居家宛敏書簡[28]」）とあるごとく、漢学の門人も名を連ねている。

敏はまた、「当春（天明六年）も去々春（同四年）も拙者も実用にて長崎へ羅越候。」（「天明六年五月十一日付土満宛敏書簡[29]」傍点―筆者）とあるように、しばしば長崎に赴いている。「実用」の内容が判然としないが、矢富氏も推測されているように（『前掲書』十三頁）、蘭医学の新技術を身につけることが、主要な目的ではなかったか。敏は寛延から宝暦にかけての青年時、「従二西京之山道作一遊。走二伏見一謁二稲大進一。学二瘍医一。共入レ室。」（碑）とあるように、山脇道作（東洋）（宝暦十二年歿）に古医方を学び、また、「稲大進」（未考）に「瘍医」（―外科医）を学んで、共に修得しているほどである。蘭医学に関心を持っても何の不思議はない。そして、そのことと関連して、敏を長崎にひきつけたのは、天明三年（一七八三）以後、「君娶柳氏。生二三男一。長名献。字彦可。冒二二宮氏一。居二江都一。名二干善医一。」（碑）とある長男二宮玄可が、長崎で通辞兼蘭方医吉雄耕牛のもとで蘭医学を学んでいたからではなかったか（佐野正己『国学と蘭学』三八頁）。敏は宣長への前掲書簡で、医学を郷校で教授する旨を述べていたが、その責任者に二宮玄可を当てていたと考えられる。玄可は藩主康定の侍医で（同上、一一三頁）、わが国の整骨医の元祖と称され、その著に『正骨範』（文化五年刊）がある（関場不二彦『西医学東漸史話』二五〇頁～二五一頁）。浜田藩藩学は、国許に於いては漢学と国学が、江戸藩邸に於いては蘭医学が中心であり、蘭方医四代桂川甫周の門人、岡田甫説（師古）が中心的人物であった。彦可は寛政五年（一七九三）藩主康定に随行し江戸に来ているので、寛政六年九月に十五人扶持をたまわった甫説とは、同じ蘭方医・侍医仲間なので当然交流があったろう。甫説は文化五年（一八〇七）、彦可の『正骨範』の集成校閲を助けている（佐野正己『前掲書』一一七頁、一二四頁）。玄可は文政十年、七十四歳で歿するが（『読史総覧』「洋学系図」一三六二頁）、墓碑銘から推測するに、後年は江戸に住んだと思われる。

敏の長崎行が、右のような「実用」のためであったことはまちがいないが、ただ、敏は蘭医学を学ぶだけでなく、講釈も行ったようである。そのことは、天明八年二月の長崎での敏の行状を、同行した山根信満がその旅行記に「既至而弟子六十有余人。歓喜而待レ門、勇躍而称レ師。設レ席受レ訓者、不レ止二昼夜一也。」（「浜田市史」二六二頁）と記していることや、宣長が久老に「石見小篠生、当春以来、長崎に逗留古書講釈、殊之外被レ行申候由」（「天明八年十月二十四日付書簡」）と書き贈っていることから明らかである。敏が講釈したものの中には、易はもちろんであったろうが、国学面では「此（―海量）甥僧ニ立綱と申物も同好之人也。先年長崎にて私万葉講尺ノ席へも出候而心安御座候。」（「寛政五年九月十二日付土満宛敏書簡[30]」）とあることから、『万葉集』なども含まれていたことがわかる。敏は、天明八年の長崎行に於て、

> 於蘭陀人のまうで来てあるに逢て、音韻の事どもを論し、皇国の五十音の事をかたりて、そを其人にとなへさせて聞しに、（『玉勝間』二の巻、「五十連音をおらんだびとに唱へさせたる事」）

とあるように、オランダ人に五十音を発音させ、宣長の『字音仮名用格』の説の正しさを実証しているが、傍に玄可がいたことはまちがいだろう。

敏のたびたびの長崎への〈出張講義〉は、「西海之長崎。己多二門生一数々至焉。」（碑）という状態をつくり出しただけでなく、青

柳種信（184）が

申年（天明八年）比は、石見小笹氏長崎より相紹候。往来ニ博多に旅宿被レ積、同志之士追々御知音ニ相成、今以国元ニて石見へ書通等仕申候輩多御座候。（「寛政三年〔月日不明〕内山真竜宛書簡」[31]傍点―筆者）

と述べているごとく、筑前鈴門の形成にも多大な影響を与えた。「同志之士」とは、種信の真竜宛書簡に、「国元ニ田尻左兵衛真言、細井判事三千代萬呂と申候而、同志の友人御座候。」（〔年紀不明〕[32]）と見える、種信と同じく、鈴屋に寛政元年（一七八九）入門した田尻真言（151）と細井判事（287）のことである。宣長が久老への書簡で、「九州辺も皇朝学信仰之人多出来候由に御座候。」と述べたのも、右のような状況を聞いたからである。なぜなら、天明八年段階では九州の鈴門は、肥後の帆足長秋と豊前の渡辺重名（114）の二名のみであったからである。

敏はこのように、肥前長崎、筑前博多、そして、前述した如く、安芸広島に〈出張講義〉を行ない、和漢の門人をつくった。寛政十年に鈴屋に入門した広島の橋本稲彦（399）も、おそらくその影響下にあったのだろう。稲彦は、「私も当年は早々より石州浜田小篠翁のもとへ参り四五十日も逗留仕貴翁の御事なともをり〳〵御うはさ仕候。」（寛政十一年四月二十八日付土満宛稲彦書簡[33]」）と記すように、敏を訪れている。

敏は、また、山陰地方の国学（古学）の普及を企図している。寛政四年には、出雲大社の千家俊信（253）が鈴屋に入門、敏と俊信とは、「右小篠は兼テ御文通も有レ之候かと承及申候。」（「寛政四年十月十五日付千家俊信宛宣長書簡」）とあるように、寛政四年以前から交流がある。出雲は宣長が「貴国は別而格別之神跡に御座候へば、何とぞ被ニ仰合一、古学発興候様に御励可レ被レ成候。」（同上）と述べているように、伊勢と並ぶ日本の二大神域であり、敏は宣長の意を受け、まず出雲大社を中心に古学を普及させようとして、寛政六年三月、京都の沢真風（374）とともに出雲に赴いている（「寛政六年三月十八日付俊信宛宣長書簡」）。ところが、

先達而石見小篠大記、并京都沢真風御地へ参申候処、何れも垂加流にて、講尺も聴衆無レ之、古学弘マリかね申候由、御紙面委細承知仕候。扨々残念成義に御座候。（「同年六月三日付俊信宛宣長書簡」）

とあるように、その〈出張講義〉は失敗に終わった。まだまだ垂加神道の勢力はあなどれないものがあったのである。そのことは、俊信が京都の闇斎学派西依成斎に儒学を学んだ垂加の出身であったこと（『島根県志』）、また、敏自身も後述するごとく、谷川士清に学んだ垂加の出身であったことからも理解できよう。しかし、出雲、伯耆はこれ以後、俊信の努力によって、「穢敷漢意之神学」（前掲書簡）垂加神道から、「御国内松江幷伯耆米子へ御越被レ成、追々古学志之人々出来申候由、扨々致ニ大慶一候。」（「寛政九年三月十一日付俊信宛宣長書簡」）とあるように、除々に古学へと転じていった。俊信の山陰に於ける門人には、後に敏の『日本書記』研究を継承し、『日本書紀私伝』八十一巻（弘化元年成）を完成した、石見国鹿足郡木部富長（とみたけ）八幡宮神官岡熊臣を始め、中村守臣、千家尊孫、天津孟雄、高橋清義、島久老、岩政信比古等がおり（佐野正己『近世国学新資料集解』一三四頁）、伯耆米子には、享和元年に鈴屋に入門した田代元春（386）・後藤直満（387）・間宮正彦（388）等がいる（同『国学と蘭学』四一頁）。

石見浜田に目を転じれば、寛政七年（一七九五）、家中今井勘右

エ門（343）・同谷口鼎（344）・周防守殿（康定）侍女隆子（345）・岡田頼母妻鍵子（346）四名の鈴屋入門がある。彼ら（とりわけ後者二名）の入門には、敏が真竜に「如仰寡君（―康定）学問好申、第一日本魂故皇朝之事甚以被信候次本居大人を篤信せられ候。」（「寛政八年四月十五日付書簡」[34]）と述べている如き、藩主康定の鈴屋古学に対する共感があったろう。康定は同年八月の、宣長の日記に、「十三日、松平周防守殿参宮、今夕当処泊、夜分至二旅館一而謁」「十六日、周防守殿下向、当処泊、自二午時一至二旅館一謁、講二尺源氏初音巻一、終日、至レ夜雅談」とあるように、江戸に下る途中わざわざ宣長に面談するほどであった。寛政七年四月の敏の松坂遊学も、康定の『源氏物語』を聞くべしとの命による（「寛政七年五月三日付土満宛大平書簡」[35]）。そして、康定のこのような鈴屋古学に対する熱心さも、「一、左京亮様（―康定）へ内々御歎キ被レ成、来春源氏物語御吟味のため御越し被レ成度心掛之由」（天明五年九月二十八日付敏宛宣長書簡」）という、敏の古学に対する熱心さによって動かされていったものだった（『井浦芳信博士華甲記念論集芸能と文学』所収、大久保正「天明五年九月廿八日付敏宛宣長書簡―翻刻と考証」四九六頁～四九七頁）。まさに、「石見浜田への宣長学の浸透に果たした敏の先導的役割は、従来よりもはるかに積極的に評価される」（同上）べきか。敏は大平に、「石州之事は、私死候はゝ誰も世話致可申（マヽ）候間、命あらんかぎりは世話可仕候」（「〔年紀不明〕十一月二十三日付書簡」[36]）と書き贈っているが、確かに石見浜田には敏に代わるべき人物はいなかった。

養子紀は徂徠学派の儒者で、国学にはうとかった。宣長歿後（敏も宣長と同じく享和元年歿）、石見から春庭・大平に刺を通じたのは、松平康定・斎藤秀満・米原充実・米原充興の四名であったが（『故翁門人姓名録之内大平春庭方音信不絶分』本居文庫蔵、「門人録」では「康定」は門人ではない。）、いずれも一家をなすほどでない。それ故、前述した如く、敏の『日本書紀』研究は、俊信門の岡熊臣に継承されざるを得なかった。文化十一年（一八一四）、熊臣は紀から、敏手沢本の『日本書紀』を譲り受け、『日本書紀私伝』の述作を志すのである（佐野正己『近世国学新資料集解』一七六頁）。敏歿後の浜田藩の国学は、康定の嗣子康任が大坂城代になったこともあり、康任が文政五年から村田春門（85）に師事（渡辺刀水『村田春門日記抄』）、浜田に於いては

（文政八年八月廿三日）石見太田権太夫書来、先月末頃、本筑前人、今は長崎住岡部怜太郎春平と申仁、浜田へ被レ参寺院に滞留、去ル十九日五六人出会仕候気憶（マヽ）能人にて、国学被レ致、此方上方へと被レ志候由、三十二歳と被レ申候、（中略）国学ノ師は青柳勝次（種暦）、歌は筑前和久彌八郎正臣と申仁に被レ学候由、（同上）

と記すように、青柳種信門岡部春平がやってきて国学研究会を始めた。彼は鈴門の流れを引きながら、

（文政九年七月二日）宮木半次郎（浜田候近臣）より来書、詠草差越、書中云。春平宅にても、月三度会仕候、五十は源氏を読み申候、富士谷信仰候て、専同人の説に随申候、万葉四九、元凱宅にて御座候。（同上）

とあるように、富士谷学派に心酔していた。また、春平の子六太郎は、慶応三年八月、平田門人となり（『誓詞帳』平田家所蔵）、かくて浜田鈴門は、村田春門とのつながりを残し、終息したのである。

最後に、儒学者敏が宣長門人となるまでの、神道国学研究の経過について述べてみたい。敏は、荷田春満・賀茂真渕と縁の深い〈古

学発祥の地〉とも言うべき遠江浜松に生まれた。そして、「君娶二柳氏一。生二三男一。」（碑）とあるように、春満門の俊秀柳瀬方塾の孫娘を娶った。羽倉学の影響は当然であろう（矢富熊一郎『前掲書』四頁）。宝暦頃には、臼井帯刀流の神道家白須賀神宮神主内藤兵庫等と交わっている（中村幸彦「小篠敏傳攷」上、五六頁～五七頁）。右のような環境にいた敏と宣長とを結びつけたものは、前述したように、「拙者本業ニては無候得共若年より垂加流なと谷川氏相学当時儒業相励申候。」（「天明六年五月十一日付土満宛敏書簡」）[37]とある、谷川士清への師事であった。『竹柏園蔵書志』によれば、天野信景の『神祇祭祀略』（宝永七年成）の写本の奥書に「明和七年寅正月　借勢州洞津谷川氏本騰　小篠敏」とあり、明和七年以前からの士清師事を明らかにしている。故北岡四良氏は、敏と士清とを結びつけた人物を蓬莱尚賢（125）と推定されたが（『近世国学者の研究』二四七頁）、安永五年（一七七七）二月十五日、尚賢方へ敏の来訪、同六年二月一日、尚賢、敏より『三河国式社考』を借写（同上、三三八頁～三三九頁）、また、「此もとに去年（―安永八年）十二月よりこなた松平周防守殿内小篠道仲と申人父子共今滝留有之、間暇には必書之事而已ニ暮申候得とも事務も不少迷惑之事共不少候。」（「安永九年七月二十五日付土満宛尚賢書簡」）[38]にみられる敏方への長逗留をみるとき、故北岡氏の推定は妥当と言える。そして、敏と宣長との仲介者としても尚賢がいたことは、言うまでもない。安永五年十月十日、士清は歿した。敏の宣長への国学上の質問は、同六年より始まる（『鈴屋答問録』）。

近世藩校についての基本的認識を、笠井助治氏の『近世藩校に於ける学統学派の研究』上・下に学んだ。記して、その学恩を謝したい。

〈注〉

(1)『本居宣長全集』第十六巻、六〇五頁。
(2) 東大本居文庫蔵。
(3) 松阪市史編さん委員会『松阪市史』第七巻、史料篇、文学部（昭和五十五年九月）。
(4) 同前。
(5) 松阪市教育委員会『本居宣長記念館蔵書目録』㈣（昭和五十三年三月）一二七頁。
(6) 岡田稔・市橋鐸『鈴木朖』（鈴木朖顕彰会、昭和四十二年十月）。
(7) 吉備津神社編編『藤井高尚伝』（昭和十五年十二月）七十三頁。
(8)(9)(10)(11)『国学者伝記集成』続編、一二八頁～一三二頁。
(12) 近藤啓吾『若林強斎の研究』（昭和五十四年三月）三二八頁。
(13) 岡中正行「本居宣長の書簡―長瀬真幸宛（中島広足写）―」（『耕人』別冊第一号、昭和五十二年十二月）十九頁。
(14) 笹月清美『本居宣長の研究』（昭和十九年七月）三二〇頁。
(15) 岡中正行「前掲稿」、二十一頁。
(16) 同前、二十一頁～二十二頁。
(17)(18)(19)(20) 同前、二十三頁～二十六頁。
(21) 大久保正『本居宣長の万葉学』（昭和二十二年九月）二五三頁。
(22) 中村幸彦「小篠敏伝攷」上（『国語国文』十三巻十二号、昭和十八年十二月）五十七頁。
(23) 矢富熊一郎『小篠御野』（昭和二十九年四月）
(24) 佐野正巳『国学と蘭学』（昭和四十八年十二月）一一三頁～一一四頁。
(25) 松阪市教育委員会『前掲目録』、一四〇頁。
(26)(27) 中村幸彦「前掲稿」上、五十八頁。
(28) 松阪市教育委員会『前掲目録』、一四一頁。
(29) 中村幸彦「前掲稿」上、五十九頁。
(30) 同前、六十一頁。

(31) 小山正『内山真竜の研究』（昭和五十四年十一月）、三五一頁。
(32) 同前、三五七頁。
(33) 中村幸彦「前掲稿」下（『国語国文』十四巻三号、昭和十九年三月）六十四頁。
(34) 佐野正巳『近世国学新資料集解』、一五六頁。
(35) 中村幸彦「前掲稿」下、六十一頁。
(36) 松阪市教育委員会『前掲目録』、一三九頁。
(37) 中村幸彦「前掲稿」下、六十六頁。
(38) 同前、上、五十八頁。

（一九八一年十月十三日　受理）